

# 慈円の時代観

伊藤 真 徹

## (一)

慈円の著述として今日学界の通説とせられる「愚管抄」に

さてもさてもこの世のかわりの継目に生れあいて、世の中の眼の前にかわりぬる事を、かく  
けざげざと見侍る事こそ、世にあわれにも、あさましくも覚ゆれ、人は十三、四までは、さす  
がに幼き程なり、十五六ばかりは心ある人は皆何事も弁へ知らるゝ事なり

とある。これによると十五、六歳の青年期に入れば政治、経済、社会の万般に涉り、是非善惡正邪曲直  
の分別智が養われると云う主張に結歸する。しかしこの分別智の分別思量の体系的整理はより一層の後  
年を待たざるを得ない。之れを慈円の場合に該当せしむれば、その青年期に萌した史観は、十  
一歳以後生活した仏教社会、その出自の貴族社会、殊に藤原同族集団の思考形式殊に近親者の  
思想的影響下に育成せられ、遂に承久二年（一二二〇）愚管抄七巻の大成を見るに至つたと思  
われる。

慈円は法性寺関白藤原忠通の子で、母については座住記、今鏡、門葉記によれば、藤原仲光  
の女加賀であるから、藤原兼実と同腹であり、親近の度が他の兄弟に比して深かつたことは、

玉葉において十分看取せられる。しかし兼実の建仁二年（一二〇二）の出家に当り、奈良法印信円を以て頼を剃らしめたことは、彼が氏寺興福寺の別当であり、慈円より二歳の年長であること、更に信円の母が中納言源国信の女であつて、異母弟である諸条件によるものである。かくの如く兼実と親昵性の緊密な慈円は、兼実の思想的傾斜を考慮することにより、両者の關係交渉によつて深められ、大成せられたと見ることは、敢えて偏見の見解ではあるまい。

藤原兼実は治承四年十二月廿九日、已刻「重衡朝臣征伐南都、只今帰洛云、又人云、興福寺、東大寺已下、堂宇房舎、私地焼失、於御社者免了云々、又惡徒三十余人梟首之、其殘逃籠春日山云々、至干凶徒之被戮者、還為御寺要事、七大寺已下、悉變灰燼之条、為世為民御法王法滅尽了歟、凡非言語之所及、非筆端之可記、余聞此事、心神如屠、自昔天性之所稟、曾不惜身命、只欲不留遺恨之名、而去冬以後、取諸身極生涯之怨、當此時忽見我氏之破滅、以彼比之、敢不足為喻、恨還為悅者歟、凡仏寺堂舎雖滿日域、東大、興福、延暦、園城、以之為宗、而於天台之阿寺者、度々遭其災、至于南都之諸寺、未曾如此之事、當惡運之時、願破滅之期歟、誠是雖時運之令然事、當時之悲哀、甚於喪父母、愁生而逢此時、宿業之程、來世又無憑歟、天下若有落居之世者、早可遂山林之素懷、臨終正念之宿願、一期之大要也、淳素之世、於今者難期、其時歟、仰天而泣、伏地而哭、拭數行之紅淚、摧五内之丹心、言而有餘、記而無益、努力々々」とある。この中注目せられることは「仏法王法滅尽了歟」、「當惡運之時」、願破滅之期歟、誠是雖時運之令然事」とある時運は、如何にして導き出された思想である

うか。当時三十二歳右大臣の兼実<sup>（一〇五三）</sup>に、かくの如き悲痛の念を懷かしめた思想の本源を探索することは、中世の精神史解明に絶対に要請せられる課題である。

(二)

兼実の言う仏法王法滅尽の時とは、二種の思想を抱擁している。即ち一は仏法滅尽であり、他は王法滅尽である。仏法滅尽とは末法の底上に立つ法滅思想であつて、末法は既に永承七年より開幕せられたことは、天台仏教圈においては既定の事実とせられている。永承七年から遡つて二千年を仏滅年代とする説は、周異記の説であつて、周穆王五十三年（B.C. 九四九年）とする。この説の我が国に行われるようになったのは、藤業時代の三宝絵詞等を始めとする。史書においては、永承七年を取扱ふべき、一一五〇―一一五九に成立した藤原通憲の本朝世紀は、後一条天皇長元九年から後令泉天皇の治暦四年（一〇六八）までが散逸しているので、詳細を知る由もないが、皇円の扶桑略記は卷二応神天皇の条に「元年（A.D. 二六九）庚寅、相<sup>ニ</sup>当晋才一主武皇帝泰始五年」、如来滅後一千二百十九年也」とあり、帝王徧年記の冒頭には釈迦の事歴をあげ、「（穆王）当<sup>ニ</sup>五十四年壬申二月十五日」、於<sup>ニ</sup>狗戸那城一入涅槃、時年七十九、とあり、我が国の地神才五代の鸕鷀草薙不合尊の代とする。又卷二の支那の三皇五帝三王を挙げる中、周穆王の条に在位中の釈迦の事歴を挙げて入涅槃を記し、「当<sup>ニ</sup>穆王五十四年壬申歳二月十五日一也」と述べ、更に卷三の神武天皇の項に「元年辛酉、仏滅後二百九十年、当<sup>ニ</sup>周穆王三年一也」と記している。しかるに卷二には、入涅槃を穆王の五十二年又は五十三年とする異説も存したので、彼は「始<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>誕生<sup>ニ</sup>終<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>泥洹<sup>ニ</sup>年月不同、暫依<sup>ニ</sup>一説<sup>ニ</sup>」

と立場を明らかにしている。五十二年説をとるものは光定で、「伝述一心戒文」に

其歳即当周国穆王滿五十二年壬申春二月十五日

と挙げ、この年から算計して「自<sub>二</sub>仏入滅<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>于大日本国延暦二十五年丙戌<sub>一</sub>」正経<sub>二</sub>一千七百四十七歳<sub>一</sub>とある。この年数には八年の誤差があるが、この年数に基いて光定は、「弘仁十年三月十五日、承<sub>二</sub>先師命<sub>一</sub>、守<sub>レ</sub>国護<sub>レ</sub>家、大乘厚力、菩薩深助、像法之末、七難易発、五濁之時、三災無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>起」とある。滅後一千七百六十八年を以て「像法之末」と表現することとは、三時説の時限を正像各千年説に準拠していることは明瞭である。これに関連して「末法灯明記が、「從<sub>二</sub>其壬申<sub>一</sub>至<sub>二</sub>我延暦二十年辛巳<sub>一</sub>、一千七百五十歳として「三宝絵」、「扶桑略記」等の年限に整理せられていることは、「末法灯明記」の成立に関する課題の解明に、一示唆を提呈しているものである。

慈円は「愚管抄」卷一皇帝年代記の才一神武天皇の条に

元年辛酉歳、如来の滅後二百九十年<sub>云</sub>と記し、「帝王編年記」の先駆をなしている。しかるに慈円は皇帝年代記の後冷泉天皇の下にも、卷四の別帖後冷泉天皇の項にも、末法到来について何等言及せず、却て「帝王編年記」には「(永承)六年辛卯、仏滅二千年、像法訖」、「七年壬辰、始入<sub>二</sub>末法<sub>一</sub>」と像末の時限を明瞭にしている。

かくの如く史家に取扱れた末法思想が、在俗知識人に受容せられた一断層を兼実について見れば、仁安二年(一一六七)十一月二十九日、御堂御八講始めに、持病を推して参仕した十九歳の兼実は、公卿一人参仕せず、殿上人只二人と云うは、先例未曾有のことであり、僧綱一人不参の法会に憤慨した彼は、「末代諸事如<sub>レ</sub>此、悲哉」と特筆している。これによつて知られ

る如く、末代の意識は知識青年層に浸透していたところで、これに匹敵する語は「只恨生五濁之世」、悲哉悲哉」(嘉応二年(一一六九)八月二十一日)である。従つて慈円においては末法問題について、こゝに問題として再論強調するを要せぬ、社会に瀰漫した思想として、論及するところがなかつたのである。

(三)

王法滅尽とは如何なる思想を媒介として成立するかと云うに、「愚管抄」卷三の序に  
人代と成りて神武天皇の御後百王と聞ゆる、すでに残り少く、八十四代……。

とあり、又卷七には「百王の今十六代残りたる程は……」とある。「源平盛衰記」卷二十四の山門都返奏状事に引く、治承四年十一月の請被下特蒙天恩一停中止遷都上子細状なる衆徒の奏状には

右釈尊以遺教一附属国王者、仏法王法之徳、互護持故也。就中延暦年中。桓武天皇  
伝教大師。深結契約。聖主則興此都。親崇一乗円宗。大師亦開当山。忽備  
百王御願。其後歳及四百廻。仏日久耀四明之峯。世過三十八代  
とある。彼等の使用する百王思想は、慈円の具体性を持つ内容とは、著しい相違が外面的には認められるが、しかも慈円は卷三に

又世間は一蔀と申して、一草が程をば六十年と申し、支子おなじ年に廻りかえる程なり。此の程をはからひて、次才に衰えては又起り、衰えては又起りして、起る度々は衰へたりつるを、少しもて起し起ししてのみこそ今日まで世も人も侍るめれ。たとへば百王と申すにつき

て、これを心得ぬ人々に心得させん料に、譬をとりて申さば、百帖の紙を置きて、次才に使う程に、いま一、二帖になりて又まうけ加ふる度は、九十帖をまうけて使ひ、又それも尽きて、まうくる度は、八十帖をまうけて使い、或は余りに衰えて又起るに、たとへば一帖残りて、その一帖今十枚ばかりになりて後、九十四、五帖をもまうけなどせんをば、衰へ極まりて、殊によく起り出づるにたとへし。

と述べて、神皇正統記の王位の無窮性に連なる発端をなしている。「神武天皇の御後百王と聞ゆる、すでに残り少く、八十四代にもなりにける」と云う、所謂「末代悪世、武士が世になり果てて、末法にも入りにたれば」と云う世を起す道理の発見は、兼実の時運と称する絶望的人生觀と対称的な思想であつて、「愚管抄」が過去のみならず、未来をも規定する、鑑戒書と称せられる所以も茲にある。慈円の史觀の構成を結論的に云えば、正像末の三時觀を下部構造とし、仏教の道理、時運の推移の上部構造を国史上に見ている。

#### (四)

愚管抄卷三に「神武より成務まで十三代は、ひしと正法の王位なり。仲哀より光仁まで三十六代はとかく移りて、様々の理をあらはすにて侍るなり」とあり、又「寛平までは上古、正法の末と覚ゆ。延喜天曆はその末、中古の始めにて、めでたくて而も又けだかくもありけり」とあつて、宇多天皇までは上古、醍醐天皇を以て中古の初めとなしている。又「冷泉、円融より白河、鳥羽の院までの人の心はたゞ同じようにこそは見ゆれ」と一時代を劃し、「後白河の御末よりむげに成り劣りて、この十廿年はつやつやとあらぬことに成りにけるにこそ」とあるのは、

「保元以後の事は皆乱世にて侍れば、わろき事にてのみ有らんずる……」の序の言と照応して、時代の衰変、「世の末の大いなる変り目」とせられている。王位の正法の、末代に次才に失われることによつて、「継目」が見出される、即ち神武から成務までの十三代は王法俗諦ばかりで変異なく、それに上古の仲哀から欽明までの十七代は、「とにかく落ち上りて」とある如く、悪王もまじり乍らめでたく過ぎ、「欽明に仏法渡りはじめ」、これから「仏法に王法はたもたれ」ることとなり、敏達から桓武まで二十一代、平安遷都を以て一期限とし、在位年代の減少を以て、「国の初より終りざまへ下り行く相」としている。又「寛平までは上古、正法の末と覚ゆ、延喜、天暦はその末、中古の初めにて、めでたくて而も又けだかくもありけり。冷泉、円融より白河・鳥羽の院までの人の心はただ同じようにこそは見ゆれ。後白河の御末よりはむげに成り劣りて、この十世年はつやつやとあらぬことに成りにけるにこそ」と、平安期を細分している。これ「王法仏法互に守り、臣下の家、魚水合体の礼違ふ事なくて、斯くめでたき国なれど次才に衰へて、今は王法仏法なきが如くになり行く」相状によつて、継目を設定したものである。

この上部構造より透視するとき、「道理を立つるに様々さまざま」なる推移を見る動力因として、仏教三時説の現存することが知られ、三時説に裏付けられて、道理は常に真理性をもつものである。

この道理は固定不変なものでなく、後三条天皇の院政に対して、「是れは皆王法衰うる上に又起し立つる継目々に、様かわりて、珍しくて、しばしば世を定めらるべき道理のあらわるゝなり」と、院政を肯定する道理は作りかえられるものである。「王位の正法の、末代に

次々にうせして、王臣の器量果報の衰えたのを起す挺の役割をなすものは何かと云うに、滅罪生善、遮惡持善の道理、諸惡莫作、諸善奉行の仏説、諸仏菩薩の利生方便によらなければならぬと強調するところに、兼実と対比して、彼は明るい人生觀、人間的情熱を社会に放射することを得た。